

巻頭インタビュー

Okoshi Kensuke
NHKニュースウオッチ9 キャスター
大越 健介

聞き手
横田 純子
(府中市立府中第四中学校教諭)

言葉で伝わること・ 言葉では伝えられないこと



音楽に縁遠いんです

横田:『ニュースウオッチ9』を見ることができる日は、「よし!」と思って拝見しています。

大越:ありがとうございます。

横田:今日お会いしてあらためて分かりました。声がとてもいい!

大越:そうですね…。

横田:あら、「そうですね…?」

大越:学生の頃、女の子によく、会って話すより電話のほうがいいと言われました。「大越君、声はいいよね」って。

横田:実際の大越さんとてもすてきですよ(笑)。ところで、その声を生かして歌われることはありますか?

大越:歌わないですね…。ただ、音楽に縁遠い人間でありながら、音楽に携わる方々にお会いする機会がありますので、

人様の前で表現するということについて、少しばかり感じる場所はあります。

横田:音楽関係で「この人は!」と思われた方はいらっしゃいますか?

大越:最近では小澤征爾さんです。取材でお邪魔したとき、ふつうコンサートホールでは指揮者を後ろから見るになりますが、団員の方たちの後ろに座って、正面から小澤さんの指揮を見ることができました。

横田:特等席ですね。

大越:そのときは、背筋に電流が走るような感じがしました。一人一人の思いや表現するものが合奏になるってこういうことなのかと。小澤さんの表情につられるようにして、みんな入ってくるんですね。やっぱり音楽は旋律だけのものではなく、人がこうやってつくっているんだな、ということがあの特等席に座って少しだけ分かりました。



○ おおこし・けんすけ

1961年新潟県生まれ。1981年東京大学入学。野球部に在籍し、ピッチャーとして活躍。日米大学野球選手権の日本代表に選出される。1985年東京大学文学部卒業、NHK記者となる。16年にわたった政治部在籍ののち、2005年よりワシントン特派員、2007年より同支局長。2009年に帰国し、NHK『ニュースウオッチ9』編集責任者を経て、2010年3月29日より同番組キャスター。

ニュース番組制作は 400メートル走のようなもの

横田：大越さんは、毎晩みなさんに思いを発信なさっていますね。

大越：ニュースを集めて、構成して、コメントをつけて、VTRをつないで…毎日のニュース番組作りは過酷な400メートル走のようなものです。午前11時頃からみんなで「ヨーイドン!」と走り出します。

横田：長いですね。

大越：よく「スタジオには何分前に入られるんですか?」と聞かれますが、ほんとうに数分前です。それまではずっと準備です。集められたニュースのVTRを見ながら前後にどういうコメントを挟むべきなのか、適切な表現を見つけるためギリギリまで作業をします。最後の100メートルではだんだん乳酸がたまって、体がこんな感じ(身振りを交えて)なんですよ。

横田：チームプレーなんですね。コメントは大越さんが考えていらっしゃるのですか?

大越：VTRのコメントは担当者が書きますが、1つの項目の前と後、ぼくらは「^{まえせつ}前説」「^{あとせつ}後説」と呼んでいますが、そこは自分で書くようにしています。下地は彼らが作るのですが、だいたい全部変えてしまってます。

横田：全部ですか?

大越：嫌ですよ(笑)。逆によくできているものには手を入れないようにしていますが、そうすると「どうしたんですか?」と言われることもあります。

多くを語らずに

横田：私は大越さんの前説後説を楽しみに見ていたんだなと思いました。表現者として学ばせていただくところが多いです。一方で言葉を飲み込まれたり、言葉にするのはやめておこう、とされたりする場面もありますよね。

大越：例えばVTRだけで完結していて、視聴者のみなさんにじゅうぶん伝わっているだろうというときは、言葉はいらないと思います。急に話し出さず、2秒ないしは3秒黙って沈黙の後説…というときもあります。

横田：そういうことなんですね。

大越：難しいのは、言葉の分量です。ぼくは余韻をもってあまり語らずに終わらせたいと思っていても「もっとこういうことを言ってほしい」と制作者側から言われるときもあります。VTRの中のコメントもそうです。報道の世界の人はえてしてさらに言葉を入れたがる。「渦巻く突風」は映像で見れば分かるのに(笑)。キャスターという仕事に就いてからは、多くを語らないことが「語る」ことだと少しだけ分かってきました。語りすぎることによって感動の押し売り、あるいは「すごいと思ってください」の押し売りになってしまうことは避けたい。伝えることがはっきりすればするほど、伝え方はシンプルになってくる。「言葉が多すぎるニュースは、物事の核心をつかんでいない証拠だ」という「イズム」を自分のチームには浸透させたいと思っています。

横田：そのさじかげんに苦労されているわけですね。私たち教師も日常多くの言葉を使いますが、大越さんは言葉の使い方について、苦い経験をされたことはありますか?

大越：ありますよ。すぐには思い出せませんが…毎日小さく失敗して自分で傷ついています。幸い、テレビに出るようになってから大きな失言などはないと思いますが…。不特定多数を相手にする場合「完璧な表現」はないので、小さく考えさせられることはあります。



○ よこた・じゅんこ
府中市立府中第四中学校教諭

ライバル番組には負けられない!?

横田：ニュースの構成はどのように決められるのでしょうか？

大越：華のあるニュース、やや毒のあるニュース、刺激の強いニュースをトップにもってきます。それでまず見てもらう。視聴率万能ではありませんが、やはり見ていただかないといけないので…。夜7時のニュースは視聴者が定まっているし、朝のニュースも競合はしていますがある程度の視聴者は付いています。しかしながら夜9時の場合は手を抜いていると、みなさん『相棒』とか『ドクターX』を見てしまうんですよ(笑)。やはり見ていただかなくてはならない。最初は引きつける力のあるニュースをもってきて、20分程度たったときに企画していたものを落ち着いて見ていただく、そういう組み合わせにしています。ほくものつけから滔々^{とうとう}としゃべっていると、「なんだこの人?」となってしまうので、アタマはトントントンとテンポよく。中盤以降、慣れてきた頃に少しばかりしゃべる。そんな感じにしています。

横田：報道記者としてではなく、一市民として何か心がけていらっしゃることはありますか？

大越：いろいろなところを歩くようにしています。電車やバスに乗るときは吊り広告を全部見るようにしたり、人の会話を耳を傾けたりすることを心がけています。

横田：毎日電車通勤されているのですか？声をかけられたりは…。

大越：東北の被災地などへ行くと「見てるよ!」とよく声をかけていただきますが、東京ではないですね(笑)。

合唱クラブの助っ人でした！

横田：ところで、中学校の音楽の授業のことなどは覚えていらっしゃるでしょうか？その頃から野球一筋だったのでしょうか？

大越：野球一筋でしたね。ただ音楽のことで覚えていることはあって、中学3年のときの担任が音楽の先生だったんです。

横田：はい。

大越：ほくのいた野球部はスポーツのできる生徒が集まる——足も速ければ水泳もできる——そんな部でした。みんな丸刈りにして。それをあるとき、先生が合唱クラブにみんなを引き抜いたんですよ。

横田：音楽の先生がですか？

大越：「あなたが率先してみんなを連れて来なさい」と言われて。合唱クラブの部員になるのではなく、合唱発表会のための助っ人ですね。とにかく男子の声がないんだと。しょうがないですよ、自分の担任の先生だし。同じクラスの部員3

～4人と他のクラスからも人を集めて、男子6～7人で合唱クラブに加わりましたよ！

横田：ふふふ(笑)。

大越：最初は合唱クラブの女の子たちから違和感満載で迎えられましたし、こちらも「なんだよお、来たくて来てんじゃないよ!」という感じで(笑)。

横田：私でもスカウトしていると思います。運動のできる子はリズム感がよくて、音楽の得意なケースが多いんですよ。

大越：正解だったかどうかは分かりませんが、スポーツと音楽と分野は違っても、だんだんのめり込みましたし、気合いも入りましたよね。

横田：音取りなどは、どのようにして練習したのですか？

大越：先生に教えてもらったような気もしますが、ドレミぐらいは読めるので(笑)。

横田：すごい！今は読めない生徒も多く、指導が大変なんですよ。

大越：楽譜は最低限読めます。長調短調の違いなども習いましたよ。ほくには、もう成人した息子が3人いますが、息子たちが中学生のときに合唱コンクールがものすごく盛り上がっていて、3人とも、最優秀指揮者賞を取りました。

横田：それはすばらしい！

大越：みんな指揮者となり、表彰されて。隠れた自慢なんです(笑)。



直截に語らない美しさ

横田：最近の子どもたちを見ていると、感動に飢えているのではないかなと思うことがあります。昔の子に比べて感動しやすいですし、情感が豊かな気がします。ゲームやバーチャル世界が身近なせいかな…昔のほうが感動することが目の前でリアルにあったり、憤慨することが生活の中に普通にあったりするように思います。でも今は生活の中にそうした状況が少なく、ちょっと人と出会ったり、何かものを見たりしたとき

や、それこそ合唱祭で泣くんですよね。教師として「感動」「感動」と言いますが、自分が中学生の頃こんなに気持ちが揺れたり、ちょっとしたことで涙したりしたかといえば、そうではなかったように思います。

大越:今のお話から考えましたが、おもしろすぎるものを与えすぎたせいではないでしょうか。それこそ高度に発達したゲームもそうだし、与えられたものがおもしろすぎるがゆえに、そっちに入ってしまう。だけど、純粹に、自分の脳や体を動かしておもしろさを発見する、活性化すべき感性や筋肉が、まだ温存されているのかもしれないですね。

横田:その反面、こうすれば先生が喜ぶから、こうすればいじめられないから、という無意識のうちの気持ちのコントロールがありはしないかなとも思うんです。今の子どもたちはまとまりがいいというか…でもほんとうにまとまっているのか、まとまらないうち村八分にされてしまうからなのか、見えないところがあります。

大越:分かります(語気を強めて)。考えてみると、最近の若い人たちに人気のある歌詞は、絆だったり、俺たちの将来だったり、語り合おうぜ、愛だの恋だの…という、そのものズバリの歌詞が多いように思います。何か一つのものにすがりたくて、それが直截的な言葉であったり、スポーツであったり風潮であったりする。すがりたい気持ちが大きくて、みんながそれにぶら下がっている、一つの方向にドンといってしまう怖さがある…といったら大げさかもしれませんが…。

横田:そうですね。

大越:先日お話しする機会があったユーミン(松任谷由実)さんは、「物事はすべて直截に語らなくても、情景なり心情は描写できる」と、描写の大切さをおっしゃっていました。「わざと戦略的に—あなたが好き—と使うときもあるけれど、私は最初に曲が出てきたときに、曲が意味している描写を言葉でつむいでいく」と。ほくもそうありたいと思います。

横田:戦略的に言葉を使っているらしいですね。

大越:語りのリズムも必要ですし、間合いも大切です。また、言わずして分かってもらうことって、日本人が大事にしてき

た文化のはずなので、それを味気ない素っ気ない報道の世界でも香らせたいと思っています。

キャスターの役割

横田:今の大越さんを支えていらっしゃる経験とはどういったことでしょうか？

大越:駆け出しの頃に警察まわりをしていたことや、政治家たちを一生懸命追いかけていた頃のつらさでしょうか。あの頃は朝昼晩もなく…。自分はNHKという看板を背負って取材はしていましたが、一人の人間としてそれを取材したいのかと言われると、そうではないこともあるわけです。職業意識で取材をして、その中で話を聞くことがつらいこともあった。でも、だんだんぼくのしていることは幸せなことなんだと思えるようになりました。今では同期の記者はもっぱらデスクワーク。取材して原稿を書く現場の仕事ができてるのはぼくだけです。若いときはマスコミの罪深さも感じて、「この仕事って何なんだろう」といちばん思っていたぼくが、今こうしていちばん長く現場の仕事をしているという不思議。でもそれも大切にしていかなければいけないのかなと思います。自分は局内自由人ですから、その幸せをかみしめつつ、自由人としての責任も自覚しながらやっています。

横田:今はインターネット、スマートフォンなどは当たり前。学校現場では言語活動と叫ばれますが、社会の中で言葉というと質よりも量のような気がします。

大越:そうなんですよ。Twitterなど、そのつぶやきは情報なのか、それとも共有すべき感性なのか。責任ある選ばれた言葉を商売にしているぼくらとしては、インターネット上にある情報とは一線を画すべきだと思いますし、そこにある情報を大事にすることはもちろんですが、そこに乗っかってしまっただけではいけないと思っています。

横田:ニュースではオンエアできないような情報も、インターネットには氾濫しています。

大越:あまりにも多くの情報があって、いろいろな価値観が錯綜しているので、みんな、共有して少し落ち着きたいのかなと思うこともあります。ぼくの役割は、何かを声高に主張するのではなく、少し落ち着いて、消化しましょうというものなのかなと思っています。

子どもたちから、ただならぬ切実さを感じます

横田:学校の先生たちにメッセージをいただけますか？



NHK『ニュースウォッチ9』毎週月曜日～金曜日、夜9時より放送中。

大越：断片的にしか見ていませんが、ぼくらのときよりも、今の子どもたちはとてもひたむきな気がするんです。ぼくらのときは「なんとかなるさ」的な感じがあって、大人も子どもも、今日よりは明日、今よりは10年後の方が世の中はよくなっているだろうという前提があったように思います。でも母校の高校で特別授業をしたとき、何人も何人も質問に来たんですよ。東京でニュースキャスターをしているのが物珍しいのもあるかもしれませんが、今の政治はどうですかとか、経済はどうですかとか、中国との関係はどうしたらいいのかとか、すごく難しい話を並んで聞きにくるんです。

横田：はい。

大越：こんなことはぼくらの頃にはなかったし、なぜそうなのかということを見ると、今の子どもたちの教育方針がいいとか悪いとかは分かりませんが、時代が子どもたちに対して「お前たち、がんばらないと」という切迫した空気を与えているんだと思います。ぼくと同年代の先生方は、同じようにのどかな時代に育っていますが、若い先生方は、もっと切迫した状況で育ってきているはずですよ。だから、子どもたちの切迫した気持ちをぜひ一緒に受け止めてあげてほしいと思います。今の教育現場は昔よりずっとつらいと思いますが、あの子どもたちのまなざしを、時折外から見るとただならぬ切実さを感じます。大変でしょうが、ぜひ向き合っていっていただきたいと思います。

横田：そうですね。

大越：つい先日母校の小学校、中学校に招かれて話をしたのですが、子どもたちは昔のようにぎわついていないし、むしろおとなしいというか、切実。こんなに年の離れたぼくに対しての「この人どういう話をするんだろう？」という視線がとても印象的でした。子どもたちは何かを求めている、その気持ちが強いんだな、と漠然と感じました。こんなことは日頃から子どもたちに接していらっしゃる先生方からすると、外部から見た人間のちっぽけな感傷かもしれませんが…。

伝え続けたいこと

横田：楽しくお話ししているうちに、時間があっという間に過ぎてしまいました。ところで、野球で培ったもののうち、今も生きていることはありますか？

大越：あります。やはり間の取り方です。

横田：ピッチャーをしていらっしゃるんですよね？

大越：そうです。間合いの取り方…、あとは腹が据わるということですかね。緊張というものをしないというか。もちろん緊張はするんですが、緊張で堅くなるということはありません。本番のほうが好きです。

横田：今後、こういう取材をしていきたいということはあるますか？

大越：やはり被災地のことです。伝えていかなければいけない、というお声もいただくのですが、時間の経過とともに新しいニュースの発掘は難しくなる。こういう伝え方は以前にもしたと、これまでの自分たちが壁になることもあります。しかしそれ以上に、自分がキャスターをしていたときにあれだけ大きなことが起こったということなんです。そこから学ばずしていったい何を学ぶのか…。まだまだ掘れていないことがあると思いますし、もう宿命的に被災地のことをこれからも伝え続けていきたいと思っています。



インタビューを終えて 横田純子

『ニュースウオッチ9』で拝見していて、大越さんの発する言葉が心地よくてずっと憧れていました。今日も終始笑顔でお話しされ、耳に優しく響く美しい声で語られました。会話運びや巧みな受け答え、選ばれる言葉や表現の仕方にハッとする場面が何度もあり、大越さんのセンスの良さに、たいへん感動しました。お話をうかがって、番組になっているあの時間が膨大な下準備のもとにあるのだということも分かり、ニュース番組の見方が少し変わったような気がします。休日はインタビューや取材等で全国・世界を駆け巡っていらっしゃるようで、体を休められる日などないような印象でした。

私たちは、子どもたちに直接生の言葉をかけ、その場でその反応を目の当たりにするということの繰り返しですが、大越さんのように、相手に思いの伝わる喋り方ができるよう、磨きをかけていきたいものだと思います。

授業者に 訊く— ①

いちよう並木が美しい“杜の都” 仙台市。北部の泉区にある仙台市立市名坂小学校を訪ねました。元気いっぱいの5年生が取り組んだのは共通教材の『冬げしき』です。子どもたちの感性を大事にしながら、授業が展開されていました。また、高校時代の先輩・後輩だったというお二人の対談は、懐かしい話も飛び交い、和気あいあいとした雰囲気で行われました。

授業者：泉山宇志（仙台市立市名坂小学校）



本時の授業の位置付け

本時は共通教材『冬げしき』を2時間で扱ううちの第2時です。この楽曲を歌ううえでのめあては「旋律の動きや強弱を感じ取りながら歌おう」としました。歌詞と旋律の動きや強弱といった音楽的な要素が合わさったことにより冬の風景の感動的な美しさが表現されていることを感じ取るとともに、歌唱表現の工夫について、試行錯誤しながら自分たちで答えを見つけていきたいと考えました。

1～4小節目と5～8小節目の旋律は同じリズムが繰り返され、ゆったりと安定した感じで曲が進行しています。それが、9～12小節目は旋律のリズムや音の高さ、強弱が変わっており、曲が盛り上がりると同時に最も歌詞を伝えたい部分であることを、第1時に子どもと考えてきました。この部分の歌い方を、音楽的要素を用いて二部合唱でも工夫できるとよいな、と思います。



菊池 健先生
仙台市立市名坂小学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・学習活動	● 教師の関わり ☆評価
導入	○ 前時に気が付いたことについて復習する。	● 前時に子どもが書いたワークシートを紹介する。
展開	旋律の特徴や強弱に気を付けて二部合唱しよう。 ○ 楽譜を見て旋律の特徴や強弱を捉えながら主旋律を歌う。 ・ 旋律の動きに気を付けながら歌う。 ・ 強弱記号に気を付けながら歌う。 ○ アルトのパートを全員で歌う。 ・ アルトの旋律の動きに気を付けながら歌う。 ○ ソプラノ、アルトに分かれて二部合唱する。 ・ 「先生vs全員」で歌う。 ・ 各パートに分かれ、音程や音色を確認する。 ・ 旋律の動きや強弱の変化に合わせて、気を付けたり工夫したりする点を試行錯誤する。 ○ 気を付けたり、工夫したりする点を聴き合い、必要かどうかを分類する。	● 旋律の動きや強弱記号をカラーペンでなぞり、視覚的に捉えられるようにする。 ● 子どもが旋律を自信をもって正しく歌えるように、はじめは教師のみがアルトで、順次アルトパートの子どもを増やしていく。 ☆旋律の動きや強弱の変化に合わせて歌おうとしているか。
まとめ	○ 最後に全員で歌い、この曲を歌った感想をワークシートに書く。	☆旋律の特徴を感じ取り、表現を工夫しようという思いや意図をもっているか。

音楽が好きな子どもになってほしい

聞き手：三宅悠太（作曲家）

先輩と後輩 久々の再会

三宅：今日は高校時代の泉山先輩のソフトな言葉の使い方や優しいお人柄といった変わっていない部分と、教師として子どもたちを立派に導いていく姿の両方を拝見して、特別な感慨を覚えました。

泉山：先日、三宅さんに電話をする機会がありまして、それがきっかけで十数年ぶりの再会となりましたね。



〇いずみやま・たかし
仙台市立市名坂小学校教諭

三宅：うれしい限りです。大学に入られたときから、もう小学校の教師になると考えていらっしやったのですか？

泉山：最初は中学校の社会科の教師になろうと思って大学に入ったのですが、小学校で教育実習を受けて、小学校も楽しいなと思ったんです。

三宅：実習が終わってから大転換されたんですね。

泉山：はい、悩みました。あとは、小学校なら音楽も教えられるというのが大きかったですね。

気持ちを引き出す

三宅：授業の冒頭で「前回、みんなアルトのパートを歌いたって言ったよね」

とおっしゃって、子どもの気持ちを引き付けながら授業を進められていました。

泉山：音楽の授業で気を付けているのは、怒らないということです。特に歌はそのときの気持ちがすぐ声に表れてしまうので、音楽室では極力そういうところを見せないでいきたいな、というのはありますね。子どもにも日々そう話しています。残念な気持ちになって歌うのではなく、自分たちでこんなことに気付いたぞって思えると楽しいから、そのためにもみんなで協力してやろうよ、という雰囲気は作りたいですね。

三宅：今までに叱って失敗してしまった経験談はありますか？

泉山：たくさんあります。その結果、今の考えに至りました。低学年の子たちはわりとすぐに気持ちを切り替えられるんですけど、特に上の学年に比べればいかにいかにうまくいかないですね。

イメージをもって歌う

三宅：今日の授業では子どもたちと対話しながら拡大譜に音の起伏をペンで書き入れていらっしやいました。それによって子どもたちの歌い方がどう変わっていくのかな、ということに注意して聴いていたんですよ。書き入れたあとは、フレーズ感が実に豊かになっていて驚きました。泉山先生は演奏に結び付けるようなことは特におっしゃっておらず、あの線をみんなでいっしょに考えただけなのに明らかに変わっていましたね。

泉山：共通教材で気持ちよく自然な流

れで歌ってほしいという思いから、旋律の動きばかりやるのではなく簡単に済ませてしまおうかな、とも思っていたんです、実は。

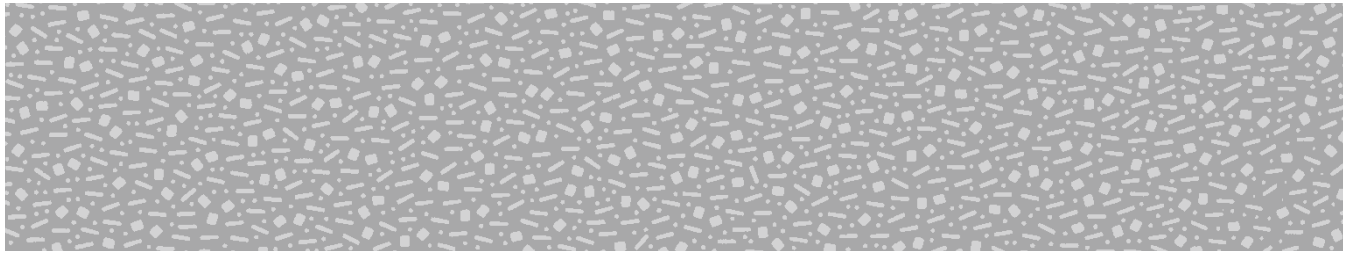
三宅：次に音楽がこうなっていくんだ、という道しるべを子どもたちがちゃんと感じながら歌っていたからこそ、意図的につくられたような表現ではなく自然なフレーズ感が生まれたのだと思います。

泉山：彼らは一つ一つの音をあまり見ていないと思うんです。どちらかというと、この曲は強弱と音の高さがリンクしているのかな、と思ったので、そのために旋律の動きを子どもたちに感じさせたかったんですね。そこで、階名を振らず大ざっぱに音が上がってるね、下がってるね、強弱もそれについていっているね、という感じで全体を捉えさせました。

三宅：最もスマートかつ効果的にフレーズ感が出てきただけでなく、子どもたちの声自体もとてもいきいきとした音色に変わっていききました。1回歌い終わったときに、先生がさっと「なんかさっきより随分よくなったんじゃない」とおっしゃって、子どもたちがうれしさを実感することができていたので、そのつながりが聴いていてとても楽し



〇みやけ・ゆうた
作曲家



く、ワクワクしながら拝見させていただきました。



他教科との連携

三宅：前時の授業では文語調の歌詞を取り上げたのですが、子どもたちは抵抗なくずっと入っていけましたか？

泉山：最初は何語が分からなかったようです。1番の冒頭の歌詞をいきなり聴かせて「何語かな？」と聞いたんです。そうしたら、「日本語だと思うけど…」とか、「分からない」といった答えが返ってきました。

三宅：少しずつ表に書いてまとめていっていましたが、意味が分かってきたときの子どもの反応はどうでしたか？

泉山：難しいんだなという感じではなかったですね。どちらかというと、体を動かしたり歌ったりしたい子どもたちなので、早く歌いたいように見えました。

三宅：歌詞だけだと、なかなか意味が分からないですね。注釈を見て、なんと

なくこんな雰囲気なのかなという。でもそうした雰囲気を感じる事が大事ですよ。

泉山：そうですね。教科間のつながりとして意識しているのは、やはり国語です。歌の場合は詩が理解できなければ自分が何を歌っているのか全然分からなくなってしまうので、特に共通教材の場合は言葉を大事にしたいと思っています。そのために音読もさせますし、宿題にも出します。「本番でかんだら格好悪いよ」と言って(笑)。

三宅：音楽で宿題とは新鮮ですね。

泉山：それから、2番歌詞の「麦をふむ」について、「麦踏みって何を思う？」と聞いたら、「脱穀」と言いました。この前、総合の授業でお米の脱穀をしたものですから、それで、脱穀はすごく力がいるし、麦は踏むのかな？と思ったのですね。でも「そうではなく、麦から芽が出たらそれを踏んでより強い麦にする作業なんだよ」という話をしたら、「知らなかった」と言っていました。結構いろいろな発見があった曲だったのではないかと思います。

三宅：将来、この曲を聴いたらきっと麦踏みのお話を思い出すでしょうね。

教えない授業？

三宅：子どもたちの根底に流れている気持ちだけでなく、プラス音楽的な部分も引き出していっていいと思います。全体的に先生が流れをつくっているけれども、「ここはこうしなさい」と言葉で教えてしまうようなことは全然ありませんでした。そこに何か思いがあるのですか？

泉山：できるだけ〔共通事項〕のようなことは、子どものほうから関係する言

葉を引き出したいと思っています。教師が言ってしまうのは簡単です。でもその場合、子どもたちは納得しても「ああ、そうなんだ、ふーん」で終わってしまうと思うんです。

三宅：ちょっとしたことですが、すごく大事だなと思いました。

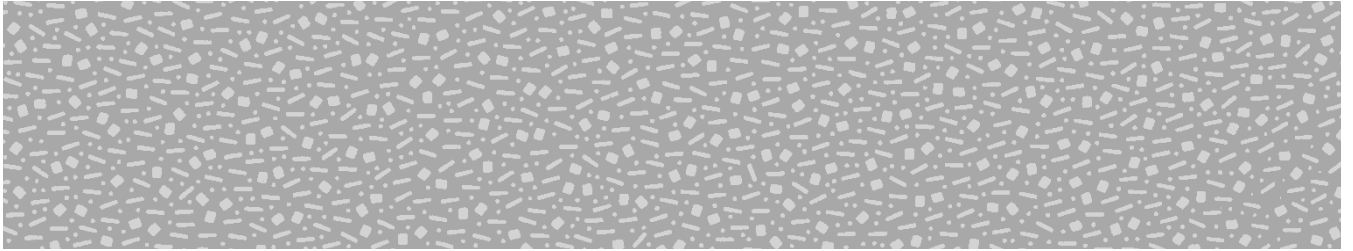
泉山：子どもの言葉ですから、稚拙だったりするんです。たとえば「サビ感がある」とか。感じることは誰でもできることだと思うのですが、それを言葉に表すことが音楽でも他の教科でも難しいところです。そこをどうにか引き出して、そして時にヒントをあげる。音楽室には、〔共通事項〕のいろいろな言葉が貼ってあるので、いつも「あそこにヒントがあるぞ」と言っています。そうすると、勘のいい子たちはそれを見て書き始めますし、それに引きずられて他の子どももどんどん書いていく。だいたいそんな流れにしていきたいなと思います。

三宅：いろいろな意見を引き出すことで、子どもたちは「音楽も人によって感じ方が違うんだ！」と自然に理解できるようになっていると思いました。ポイントとしていっていいことはありますか？

泉山：人によって感じ方が違うのは当然なので、互いを否定するのではなく、こういう感じ方もあるのね、と認め合ってほしいと思っています。いつも、「音楽にはこれが正解というのはいないよ」という話はします。

三宅：教師が教えない、というのがミソですね。それは泉山先生がしっかりと音楽観をおもちだからと感じていますが、子どもたちの意見がまとまらなくなってしまうことはないんでしょうか？

泉山：よくあります。その場合はいろ



いろいろ試してみたり、どっちがよかったかなとみんなで話し合ったりします。こっちのほうがいいかなあ、とか、うちのクラスはこんな感じで歌おうか、という感じでまとめていくようにしています。

三宅：何回か歌った頃に、「声はきれいになったけど、言葉をもっとはっきりしたほうがいいと思う」と、子どもが決然と発言していましたね。あのような技術的なポイントは日頃から授業で投げかけていらっしゃるんですか？

泉山：途中から子どもたちが自信の無い顔になっているなど気付いていたので、彼女はあそこでいいことを言ってくれました。あの場面では口を開けるだけでだいぶ変わってくると思い、「じゃあはっきり歌おう、口の開け方だよ」とアドバイスを入れました。技術的なところは結構こちらから介入していいのではないかと考えています。

子どもに試行錯誤させる

三宅：子どもたちと歌い方を工夫する段階で、「まずやってみようか、それで

おかしいと感じたら戻せばいいじゃない」とおっしゃっていたのが印象的でした。

泉山：こちらから答えは出さないぞといつも思っています。自分たちで考えて考えて試して失敗して、じゃあ何がよかったのかな、というのが自分たちの答えになるのだと思います。ときどき、子どもたちは無謀なことを言いますが、そのほうがかえっておもしろい

ですね。試してみてこっちのほうがやっぱよかった、ということがあるので。

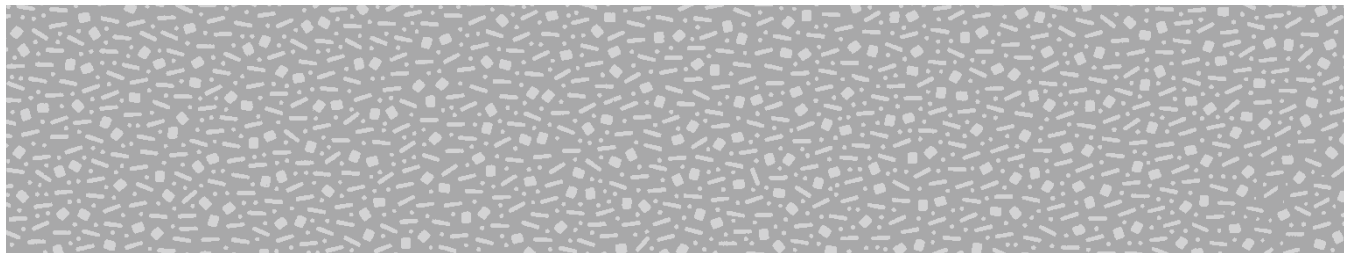
三宅：説得力がありますよね、試してみるというのは。

泉山：我々が大人になって音楽をするときも同じで、そういうときがおもしろいじゃないですか。学校でそのように音楽をやってきた人たちが、大人になっても音楽を楽しんでいるんじゃないのかな、と感じるんです。だから、今教えている子どもたちが、これから音楽をするかどうか分かりませんが、こんなことを試して楽しかったな、とか、歌って楽しかったな、という経験があれば、将来どこかで生きてくると信じています。

パート分けも自主的に

三宅：パートが分かれる部分に入り、まず最初に「アルトやりたい子は？」と自





主的に挙手させていたのは、やっぱり今までの経験からですか？

泉山：そうですね。アルトは音がつられそうで難しいけれど挑戦しがいがあるとか、あまり高い声が得意ではないとか、それぞれがどんなパートなのか子どもたちも分かっているの、二部合唱ではどちらのほうが自分は好きかという意識をある程度もっているようなんです。

三宅：「アルトがやりたい」と手を挙げた子が10人ぐらいだったと思うんですが、思ったよりも多くてびっくりしました。普通は主旋律のほうが好きなのかな、と思っていました。

泉山：アルトが大好きで、「よし、やるぞ!」とやる気のある、自信をもっている子が多いと思います。また、子どもたちを見ていると、仲良しどうして同じパートになりたがるんですね。そうすると安心できる友達が近くでいっしょに歌っているという意識から、さらによい声になるので、こちらで決まらないでフリーでいいから、と言うこともあります。だから、僕の授業うるさいんです(笑)。

三宅：今日とてもすてきだと思ったのは、最初にアルトを先生が美しいファルセットの実音で歌い、子どもたちに聴かせていたことです。男声なのにどうやって歌うのかなと思ったのですが、あの音色を聴かせることができたのは、耳から聴いて音を身に付けていく子どもたちにとって、よいことですね。

泉山：実は合唱団でカウンターテナーを歌っていた時代があったんですよ。

三宅：そうだったんですね。美声を聴けてよかったです(笑)。

うまくリフレッシュさせる

三宅：授業中、子どもたちをずっと座らせているのではなく、向かい合って歌ったり席を入れ替えたりと移動を取り入れていました。

泉山：最初からずっとソプラノとアルトで場所を決めて進める方法もあると思うんですけど、途中どこかでグループで演奏してみたり、並び方を変えてみたり、歌唱の授業では何かしら移動を入れることが多いと思います。

三宅：鑑賞の授業では移動するわけにいかないですもんね。

泉山：ただ、鑑賞でも同じことを思ったグループごとに分かれて、どう思ったのか話し合うことがあります。鑑賞もただ聴かせるだけだと、子どもたちが見るからに飽きてきたな、というときもあるので、ちょっと体を動かして歩き回らせることもあります。子どもたちとの付き合いも長いので、うちのクラスの場合はここでだれるだろうなというのがだいたい分かるんですよね。

三宅：特に小学生の場合は、人の話を

ずっと聞き続けるって難しいことですよ。でも移動を上手に用いることで覇気がいい具合に保たれますね。教えている大学の授業でも取り入れてみようかな(笑)。

音楽好きを増やしたい

三宅：今後、こういうことをしていきたいとか、こんな先生になりたいとか、どんな些細なことでもかまいませんが、将来のヴィジョンは何かありますか？

泉山：とにかく、音楽好きを増やしたいですね。小学校の教師はそれができるのがすごく楽しいところです。音楽って、どんな子どもも活躍できます。だから、そこで自分にもこんなことができるんだ、ということを見つけれられるような授業をしたいと思っています。これまでそんなに音楽はおもしろくないと思っていた子たちが、意外と俺たち歌えるじゃん、とか、考えればできるんだ、と思えたらすてきだなと思います。

編集部メモ

授業後、6年生のみなさんが合唱『Wish ～夢を信じて』(作詞・作曲 杉本竜一)を聴かせてくださいました。伴奏はこの曲を編曲された三宅氏。子どもたちとの温かな音楽の交流となりました。



授業者に 訊く— 2

中学校は、2014年NHK大河ドラマの主人公・黒田官兵衛ゆかりの地、福岡県朝倉市を訪れました。3年生が各パートに分かれて、『旅立ちの日に』の強弱や抑揚を生かした表現を練習します。聞き手は、中学校での指導経験もあり、現在は鹿児島大学教育学部で教鞭をとられる日吉 武先生です。



授業者：堀田 尊（朝倉市立杷木中学校）

本時の授業の位置付け

本時は、校内研究授業の公開に向け、合唱活動を1楽曲の題材構成として設定しました。6時間扱いのうちの第2時にあたります。前時では、曲想からイメージをもつことができるように、この曲の生まれた背景を伝え、1、2番（後半のサビの前）まで各パートに分かれて音取りをしました。生徒は、この曲を歌ったことはありませんがどこかで聴いたことがあると言っていました。卒業式の定番曲ということは知っていたようですが、実際に歌うことで、歌詞と音楽との関わりから歌い方を考えて歌唱表現を高めていくことをねらいとします。本時では、強弱や抑揚を生かした合唱を目指します。

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価
導入	○『旅立ちの日に』の1、2番まで合唱する。 ・ 歌詞に生命を感じるように歌うにはどうしたらよいかを考える。（めあてへの補助発問） 強弱や抑揚を生かして合唱しよう。	● 前時の学習を思い出しながら合唱させる。 ● 本時のめあてを確認することができるよう、補助発問を行う。
展開	○ パート練習をする。 ・ 『旅立ちの日に』が作曲された背景についてVTRで視聴する。 ・ 歌い方を確認する。 ・ 強弱：歌詞との関わりを考える。 ・ 抑揚：旋律の動きや音の高低に着目する。 ・ パートで反復練習をする。	● 歌詞にこめられた気持ちを知ることができるように、作詞者である小嶋校長先生の映像を視聴させる。 ☆ 模範唱、ピアノ伴奏CDを活用させた後に実技テストを行う。
まとめ	○ 合唱する。 ・ ハーモニーの部分(3声)から歌い合わせる。 ・ ピアノ伴奏とともに合唱する。 ・ 振り返りをする。	● 強弱や抑揚を確認しながら、3声の部分から合唱させる。 ● 強弱や抑揚について工夫できたこと(成果)と次時への課題を見いだすために、チェックリスト型シートを活用する。



山田耕二 先生
朝倉市立杷木中学校校長



技能を伸ばし、感受する心を育てる

聞き手：日吉 武（鹿児島大学教育学部音楽科准教授）

その場で生徒に評価を返す

日吉：授業の最初と最後に、教室の壁や窓に沿って生徒が1列に並んで合唱していたのが新鮮でした。2列や3列はよく見えますが…。

堀田：教科書教材を扱うときは、一人一人の顔を見て、声を聴くために1列に並ばせます。毎時間、冒頭に既習曲を何曲か歌いますので、この形態が必然になっています。



○ほりた・たける
朝倉市立杷木中学校教諭

日吉：生徒の顔を見ることを心がけていらっしゃるんですか？

堀田：顔を見ますね。顔の表情も一つの評価基準になりますので、いい顔でいい声が出ているときは賞賛します。

日吉：そのあたりのお心がけがよく見えました。気になったのは、パート練習の最後でCDを止めて歌わせたとき、チェック（評価）をされていたことです。毎回されるのですか？

堀田：そうですね。毎時間、実技の場合は様相観察や実技評価を行い、顕著な子はA、少し支援が必要な子はCをつけます。Bは書き留めません。関心・意欲・態度については、単元を通して見るようにしています。ただし、実技テストや音取りをするときには、黒板に評価基準まで書くときがあります。音程はも

ちろんですが、例えば暗譜で歌えたとか、身体を使って歌えているだとか、その場で「A!」「合格!」と言って評価を返しています。

日吉：ほう！

堀田：よかったのか悪かったのか、生徒たちの自覚がないと、やったままになってしまいます。「うん合格」と言ったらB基準ですね。「今日はスペシャルAだね」と言うこともあります。

教室外で行うパート練習

日吉：口が開いていない子や下を向いている子には、目の前に行って声かけをなさっていましたね。

堀田：知っている曲で気持ちよく歌っているはずなのに、あれ、どうしたんだろう？という子には「お腹が痛いのに最後まで座らずにがんばったのはえらい、先生は評価するよ」と言ったり、音取りに苦勞している男子には「さっきよりよくなっているよ」というような声かけをしたりしています。

日吉：そういう声かけがたくさん見られました。パートごとにリーダーがいるのですよね？

堀田：はい。今日は言い合う場面は少なかったのですが、練習が白熱してくると「違うよ、こここうやん!」「なんでちゃんとせんね!」と怒ったりしています。3年生だとそういうところがありますね。

日吉：アルトは廊下で練習していましたが、声が響くので気持ちいいですね。廊下で練習するということが習慣化しておく、いろいろなことができているなと思いました。音楽室に生徒が1人もいなくなってしまうのには

びっくりしましたが。

堀田：ピアノで指導するときや評価をするときには音楽室に呼びます。合唱のパート練習のときは、パート別のCDだけを持たせて外に出してしまいます。

日吉：音取り用のCDが、今回は歌声だけが入っているものでした。音を流したままにして、サボったりしないかなと思ったのですけれど。

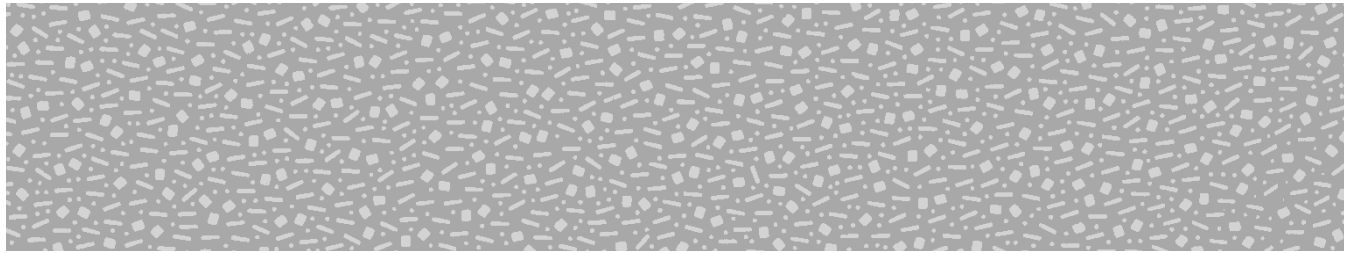
堀田：サボるというより、それ以上声を出さなくなってしまう意欲をなくしてしまうことがあるんです。そのときはCDの音量を下げたり、難しいところはぼくといっしょに歌ったりします。練習用CDは音程を取るときには有効に使えますので、それ以外の強弱や間の取り方、抑揚をつけるところなどはいっしょにします。

日吉：練習用の音源を止める場面があったのがよかったと思います。ずっと流しっぱなしだと、どうなってしまったらと思うと思って。

堀田：緊張感がなくなってしまうですよ。今日も「ピアノパートのCDを貸してください」とソプラノが希望したので、そこはリーダーに任せました。



○ひよし・たけし
鹿児島大学教育学部音楽科准教授



技能を鍛える大切さ

日吉：合唱教材に〔共通事項〕をそのまま関連させるのは、難しいところもあると思いますが、より音楽的に深めていくとか、技能を高めていくために何か気を付けていますか？

堀田：音楽の場合は、ある程度技能が身に付かないと、楽しくないと思うんです。技能は鍛えれば成果を感じやすいですし、生徒たちも上手になるとうれしので、どんどん技能で攻めていくことはできると思います。今回の合唱コンクールでは、1年生に「絶対に音をはずしちゃいかん」と追い込むようなことを言っていました。

日吉：ははは(笑)。

堀田：そうやって1年生から意識させていくことは大事ですし、そうすれば2、3年生ではノーマスでできるようになります。男子は変声期でつらいところもありますが、妥協せず、とにかくよく聴く。ハーモニーが合って「ああ、美しい」と思えるためには、ある程度の技能のたたき込みは必要だと思います。感受ばかりしていても技能がなくては、表現が貧しくなってしまいますから。

日吉：今日の授業では特に〔共通事項〕については見えませんでした。〔共通事項〕は音楽の中に含まれているものだから、いろいろなやり取りの中で支援したり意識させたり、というほうがいいですか？

堀田：一度この研究をして大失敗しました。先に理屈や知識を詰め込んでしまい、感じることに別になってしまったのです。まず音ありきで考えて、例えば「ここはこうだから羽ばたく感じがするよね」と言うと「ああそうか」と生徒たちは感受するわけです。〔共通事

項〕はあくまで教師がおわせていくものではないかなと思います。理想ですけれど。

日吉：感じる心が高まることは財産だし、それこそ生き方の高まりですね。

堀田：もっと感受の部分の授業の中で取り上げていくべきだと思います。

日吉：今日の授業でも、ドリル的に技能を繰り返しているわけではなかったのに、最後に合唱するとめあて通りになっていました。あの抑揚やふくらみ、声の統一感はすばらしかったです。

堀田：歌唱活動はワンパターンになりがちなので、初めての音取りでは、段階を踏みます。やみくもに行うのではなく、変化をつけて練習させます。生徒たちが飽きてくる場合は、こちらから「できたね、じゃあもう少しここをこうしてみたら？」とすかさず課題を与えます。そして評価することで、「できたけれど、これでいいのかな…」という迷い

をなくすようにしています。

「サビ」を歌うまでの道のり

日吉：次の授業でサビの部分の歌うときには、強弱や表現を変えるのでしょうか？

堀田：次は音取りと強弱に特化します。3年生ですから音程と強弱を同時にやっていきなさいと言っています。

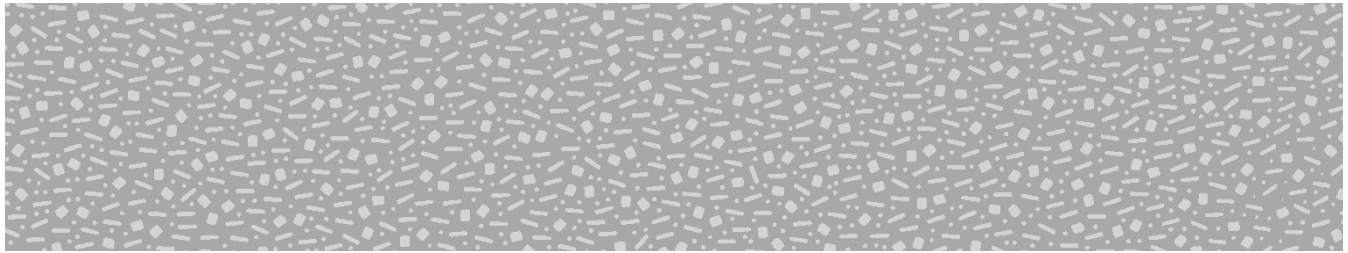
日吉：サビに入る手前で「そこから先は歌わない」と止められてしまい、生徒たちが「うっ」というような、抵抗を感じているように思いました。

堀田：そうですね。「歌ってもいいよ」と進めることもできるんですけど、わざとフラストレーションをためているんです。

日吉：なるほどね(笑)。

堀田：そして次の時間に「さあいよいよ





よ！」となるわけです。次の時間の導入でも、一度は今日の部分までで止めるとしています。そうしておけばスパッとできるんじゃないかな、と思って。

日吉:かなりフラストレーションがたまっていそうですね(笑)。今日もちょっと歌い出している子もいましたよね。

堀田:「はい、だめだめ！」とすぐに止めました。「あのね、音が取れたよって見せびらかさんね。だけん、がまんしよ」と言いました。

音楽を学習する意味を知る

日吉:話題は変わりますが、1年生から3年生の指導において、何か柱にしていることはありますか？

堀田:3年生は総合的に扱いますので題材によって変化しますが、例えば「音楽を学習する理由は何ですか」という

ことを勉強します。1時間目は『We Are The World』の映像を見せて、めあてやこの曲がつくられた意図を学習プリントに書かせます。2時間目は実際に曲を歌う。3時間目は「音楽は、人間や世の中にどのような働きを与えているのか」を考えます。「演奏」「チャリティー」「教育」「宣伝効果」など、いろいろな例を挙げて分類していきます。「音楽は演奏ばかりが目的ではないね。『We Are The World』みたいに人の命を救うこともできるんだよ、すごいでしょ」と。3年生はいよいよ義務教育最後の学年ですから、なぜ音楽を学習しなければいけないのか、その意図を知ることが大切だと考えます。『We Are The World』は3時間構成で扱います。「今から30年も前の作品なんだね」「クラシックだけが音楽じゃないんだよ」という展開で進めていくと、どんな生徒でも居眠りしませんね。

日吉:素晴らしいですね。今日の授業でも『旅立ちの日に』の作詞者である小嶋校長先生に関するビデオを見せていらっしゃいました。

堀田:曲の背景を伝えることで、内容がより深く分かることがあると思います。教科書掲載曲も、はじめは「教材」として載っているものだと思っていましたが、学習していくうちに内容も構成もすばらしく「どういう思いでつくったんだろうね？」と生徒と話をするとところまでもっていきます。世界の民族音楽についても必ずバックボーンがありますから、エピソードや映像資料を提示するようにしています。『夏の思い出』であれば、中田喜直さんについての番組を見せます。そういったものを発掘するのは大変ですが楽しい作業です。

日吉:ご苦労がよく分かります。他の曲でも今日のようなことをなさるんですか？

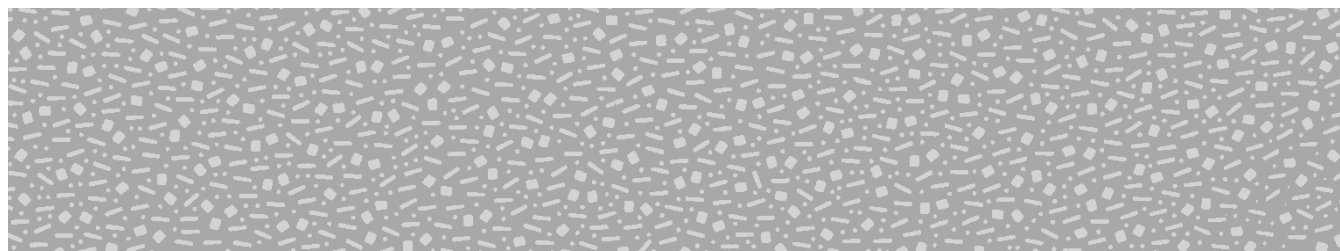
堀田:『花の季節』でメリー・ホプキンの動画を引っぱりだしたり、合唱曲ではほかの学校の生徒が歌っているよい演奏をモデルとして示したりします。映像だとしぐさや動作が分かりますから、そういった映像はストックしています。あとは道徳の教材でドキュメンタリー番組を見せます。鑑賞の授業は道徳につながりますから。

日吉:音楽指導はかなり道徳について寄与できますよね。

堀田:おっしゃる通りですね。

音楽指導に映像資料をどう生かすか？

日吉:映像資料について逆の切り口からお話をしますが、最初に映像を見せ



すぎると、生徒が曲と出会ったときのまっさらな気持ちがそがれてしまって、考えが限定されてしまうのではないかとも思ったのですが、そういう危惧はありませんか？

堀田：もっていき方によると思います。大きな合唱曲を扱うときには目標として「こういうのを目指そうね」と導入でモデルを示します。また、だんだんと表現が高まったときにもうひと工夫するために、参考としていろいろな資料を提示する方法もあります。確かに最初から見せてしまうと決めつけてしまって、物まねになってしまう可能性もありますが、そこは加減すればいいと思うのです。狙う内容と段階、目的に応じて映像は出すべきだと思います。ですから最後に「みんなの演奏も世界に一つしかないすばらしいものだけど、ほかにどんな演奏があるのか見てみようか」という、そこまできちんと高めておけば、「うわあすごい！」と共感できると思います。

日吉：扱いたい内容に応じて、吟味されているわけですね。

堀田：1時間で1曲を仕上げる場合には、授業の最後に映像を見せることもあります。『パフ』などは、最後にピーター・ポール&マリーの演奏を2つぐらい見せて、そこでその曲を歌った価値を結び付けます。そうでないと教科書に載っている教材をただ歌った、というところで終わってしまうので。

聴く力を育てる

日吉：ところで今日の授業では、最初は閉じていたピアノの蓋を、最後に合唱するところで全開にしましたね。

何か意図があったのでしょうか。

堀田：ピアノの伴奏で歌わせたいので、小さい音をより響かせるために半開でなく全開にしました。指揮をするときはカラオケのCDを使いますが、最後は呼吸を合わせるために、ピアノを弾きます。1年生で共通教材の『赤とんぼ』を扱ったときには、生徒たちのプレスに合わせて弾くと、逆に待ってくれるんですね。

日吉：なるほど。ピアノと合唱で反応し合って、とてもいい感じでした。やはり「音で教育する」ことはとても大切ですよ。システム化した流れの中でもうまくなると言うけれど、ちょっとした音の与え方で、生徒の感性って変わると思うんです。先生の気持ちの入った生の音ならなおさらですね。以前ほかが教師として教えていたときも、生徒が「先生、今の音は何？」と聞いてきたら、この子は音の感じ方が変わったなと思っていました。

堀田：そこなんですよね。入学した1年生たちには、必ず「聴くとはどういうことなのか」という「聴く」ワークショップをします。ポリエチレンの袋を1列ずつ渡して「音がしないようにうしろの人に渡してね」と言うんです。そうする

と、こう(身振り)して渡すじゃないですか。まわりの子も息を詰めてそれを見ている。「うん、今みたいに音や人の話を聴いてね」と。これを最初にします。

日吉：先生が授業で実践されているように、生徒への声かけを怠らないことはとても大切だと思っています。

堀田：実技はその場で見て返す、音楽科の口頭評価は大事だと思います。小学校での経験から大人に不信感をもっている1年生がいることもあり、教師の言葉が通らないこともありました。彼らは正当な評価をされてこなかったんだなと思いました。それは大人の責任です。それから折に触れて、怒ったりほめたり…ちょっとでもよくなったら「よかった」「今日は誰も落ちこぼれなかった」と肯定的な評価をするようにしました。怒るときにも、自分たちが悪かったと真摯に受け止められるように言うことが大事で、「ここがだめで怒っている」「このままだと将来心配だから怒ってる」と言うと、「ああそうか…」と分かってくれるんですよ。「1週間たってよくなっていたらほめる。そのかわり、変わっていなかったらまた怒るからね」と。そういう約束と自分での意思決定こそ、生徒指導だと思っています。



特集

今日的な教育課題を 音楽科でどう生かすか ～ほんね オフ ミーティング～

今回の座談会は「覆面による本音トーク」のスタイルに戻ってお届けします。

テーマは、教育界における今日的な課題を音楽科でどう生かすか。

3つのキーワードのもと、現在活躍されている3人の先生方にお話を繰り広げていただきました。

進行とコーディネートは、船橋市立坪井中学校校長の佐藤日呂志先生。

さて、どんなことが話題に…。各キーワードの佐藤先生の総括と併せてご覧ください。



言語活動の充実

道德教育

ICT教育

[出席者]

A先生：小学校・学級担任(女性)

B先生：小学校・音楽専科(女性)

C先生：中学校・音楽専科(男性)

佐藤日呂志(船橋市立坪井中学校校長)

音楽科における 言語活動の充実

「言語活動の充実」への意識の高さ

A: 私の地区では担任が全教科を指導していますが、音楽科に即した言語活動の充実というと、ワークシートの工夫、鑑賞での意識といったことになると思います。市の音楽研究会でも、研究の柱の一つとしています。



B: 勤務校では「確かな言語力の育成」が研究テーマです。今年は算数に特化しましたが、先生方の中には「言語力を高めていかなければいけない」という課題が実感としてありますね。

C: 私の地区の研修テーマには、「関わり合い」という文言が多く使われています。子どもたちどうしの「関わり合い」を研修の視点にして、豊かな情操を育てていきましょう、ということです。ただ、音楽科も含めて、「言語活動の充実」が取り上げられた本来の意味が、どこかに置き忘れられてしまっているような面も感じます。子どもたちが話し合ったり書いたり、そういう活動が入っていれば何となくそれでOKというような…。

思考力・判断力・表現力のための言語活動

A: 音楽部ではない先生方の中には、例えば鑑賞での言語活動というと、「聴いて感想を書かせればいいんだよね」とおっしゃる方もいるようです。国語の作文力があれば鑑賞の評価は高くなる、ではいけないと思うのですが…。

C: 本来は学力としての思考力・判断力・表現力を育むための言語活動であるはずが、活動自体が目的化している状況もあります。研究授業後の協議会などで、「それじゃあ言語活動はどうだったのでしょうか」というところから話が始まり、最後には「子どもたちが活発に話し合えてよかったですね」という結論に達する…。

A・B: あるある！

B: 先生方の中には「音楽科での言語活動ってどんなもの？」とか「えっ、音楽でもやるの？」という方がいます。音楽科では、ただ話し合いをすればいいというのではなくて、子どもたちがもっと音楽を楽しみたいとか、理解を深めたいというようになってくれればいいなと思っているのですが、担任の先生方にどう伝えていけばいいのか…難しさを感じます。

A: 音楽部で研修している私たちが、学校に戻ったときにもっと広めていかなければいけないのかもしれないかもしれませんね。

鑑賞での実践

A: 鑑賞の指導では改善点が多いと反省しています。授業の最初は、部分的に音楽的な要素に着目させたり、子どもたちが話し合ったりして、みんなで確認していくのですが、最後に全曲を通して聴いてワークシートに書かせたあと、そのまま書きっぱなしになってしまうことがあります。

B: そこからの子どもどうしの関わりですね。「あの子はそんなふうに感じたんだな」というような。

C: 同じ音楽を聴いても「友達とは自分と感じ方が違うな」と思えば、「なぜだろう？」という追求のエネルギーが生まれてくると思うんです。子どもたちの動き出しが始まるのです。だから、子どもの中にある思いを分かり合えるような状況を教師が意図的につくってあげる。その手段の一つが「言語活動」だと思うのです。

B: 「どんなことを思いましたか」と言うと、言葉ではなんて言っているのか分からないこともあるので、「リズムっていう言葉を使うといいんだよ」とか「拍子っていう言葉を使うといいんだよ」とアドバイスすると、次の授業では別な子どももそういう表現ができるようになってきます。その積み重ねをしてくと、高学年になったときに、いろいろな言葉で友達どうしの交流ができていくのかなと思います。



体験したものと結び付ける

A:特に低学年では遊びの要素が入るとすごく楽しめるので、「これはリズムが変わったんだよ」とか「今、音の高さが変わったね」と教師が意識して言うことで、子どももそういう言葉を使うようになるのではないかな、と思います。低学年の子どもは体もよく動かすし反応もするのですが、言葉としての知識がまだ身につけていません。子どもの体験を通して言葉と結びつけることが大事だなと思います。

B:低学年の間にしっかり身につけることが大事かもしれませんね。授業時数が少なくなる高学年になってからでは、なかなか難しいと思います。

C:中学生になってしまうと、ほんとうに手遅れという感じがするんです。今お二人がおっしゃったように、小学校の低学年の頃からもう少し指導していただくことに大賛成です。

歌唱指導の中で

B:話し合って「こうしたい」と言ったけれども、それが最終的に実際の音楽に表現されなければいけないじゃないですか。「優しく歌いたい」「きれいに歌いたい」と言っても、その雰囲気や音楽として表現されているかどうかを評価するのは難しいですね。

C:そこまでいかないですね。

B:そう、だから難しいんです。確かに子どもたちの思いは言語活動で出てくるんだけど、最終的には「歌唱としての表現」を達成しなければいけません。

A:5年生の歌唱で『いつでもあの海は』を指導したときは、毎時間子どもたちの歌を録音して、授業の始めと終わりでどう変化したのか、子どもたちが自分たちの演奏を聴いて判断できるようにしました。いろいろこうしたいと言っていた

ことがどうだったのか、実際に聴いてみて、そこでやっと子どもは実感できるようです。

B:中学生になると、合唱コンクールが盛んですが、お互いに「もっとこういうふうに歌おうよ」といった話し合いはできるんですか？

C:はい、夢中で長い時間練習しています。

B:長時間の練習も、もっとよくしようって思う気持ちがあるからできるわけですね。

楽譜への慣れと言語活動

C:低学年の頃から楽譜に慣れるということは、言語活動と深く関わってくると思うのですが…。

A・B:そうですね。

C:低学年の授業で、図形楽譜でもいいしリズム譜でもいいし、何かしら子どもたちに視覚的に触れさせて音楽と関わらせる、そういう指導をするのはとても自然だと思うんです。よく読譜力はどうしたら育つのが話題になりますが、短期間で身につく能力ではないと思います。やはり小さい頃から楽譜に親しむという経験をたくさんさせてあげたらいいと思うんですね。

A:小学校1年生では1小節分の音価を示した表裏のカードを用いています。表はタンとかタタなどと書いてあり、裏はふつうの音符が書いてあります。早いうちからタンタタタンなどで読む習慣をつけておくと、低学年でも音符が読めるようになるんですよ。でも音の高さを五線で示すようになると、とたんに読めなくなりますね。だから高学年で楽譜が読めなくなる子が増える。こちらとしては時間がなくて、合奏をするときにドレミを書いたものを配ったり、分かるお友達が書いてあげたりしてしまうんです。やはり低学年からきちんと指導しなければと痛感します。

B:昨年、小学校3年生を1クラスだけ指導していましたが、そのクラスはフラッシュカードを使って毎時間最初の5分ぐらい読譜の練習をしました。そうしたら、今4年生になった子どもたちのほとんどが楽譜を読めるんですよ。

A:いいですね。そういう積み重ねは大事ですね。

B:そんなことから、同じフラッシュカードを教室にも貼ってもらえるようにしました。カードが読譜に効果があることを実感しています。

教室に掲示してある〔共通事項〕の「言葉」

B:〔共通事項〕そのものを教室に貼っている学校もあります



し、〔共通事項〕を子どもたちから出た言葉に置き換えて貼っている学校もありますよね。

A: 何もないところから何か書こうと思っても無理なので、子どもの手がかりやヒントになるようなものを掲示しておくことは大事だなと思います。

C: 子どものほうで、こういうことを書きたいから掲示物の言葉を引っ張ってくるというのであればすごく効果はあるんですけども、やはり子どもの思いと連動していかなければ

いけないと思うんです。

B: 思考力・判断力・表現力を身につけさせるための言語活動である、ということですよね。

C: 例えば音楽づくりや創作などで、どういう音楽をイメージしてつくろうとしているのか、思いや意図といった見えにくいところを見えやすくする。そのために、言葉で表現したり書いたりする活動はとても大切だなと思います。

「言語活動」を狭く捉えずに！

佐藤日呂志



今回の話題の一つ、新しい学習指導要領で示された「児童生徒の言語活動を充実する」ことについては、一般的なコミュニケーションに加え、音楽科としては、「思考力・判断力・表現力を育む視点から、感受をベースにした音楽表現の工夫」、「鑑賞における音楽のよさや美しさなどを理解し、味わって聴き深める」ための言語活動として整理すると分かりやすいでしょう。いつの間にか、国語科ですべきことを音楽科でもしなければならないというように捉えてしまっている現場も見受けられます。実際の学校教育の中では、教師のコメントや子どもの作文、そういうものをきちんとすること、作品や掲示物などに間違いがあったらそこで

ちゃんと直して指導する。そういった言語環境づくりも含めて言語活動だと捉えていかなければいけません。

主体的な鑑賞活動を促すために、小学校では指導要領のB鑑賞(1)ウに「言葉で表すなどして」、中学校ではB鑑賞に「言葉で説明するなどして」という文言が加わりました。この「など」は「音楽科としての言語活動は言葉だけではないですよ」という意味です。例えば小学校低学年では言葉と同じように、身振り手振りで表すことや、学習場面によっては感じ取ったことを色や形などで表すことも考えられます。このような表し方も「など」に含まれるということが示されているのです。またこの文言は、鑑賞領域で示されていますが、必ずしも鑑賞で行わなければいけないわけではないのです。当然、歌唱や器楽にも「言葉」はあるわけですから、狭く捉えて「〔共通事項〕の文言が使えること」や「お互いのコミュニケーションがスムーズになること」「話し合いができること」に特化しないでいただきたいと思います。何より音や音楽がそこにあることが大事だと思います。

音楽科における 道徳教育

共通教材で扱う

A: 歌唱共通教材で道徳教育を扱えばいいのかなと思ったのですが、それだけじゃダメですよね？

C: そういう考え方でいいですよ。



A: それだけでいいんですか!? いっしょに声を合わせて歌うとか、相手のしていることを認めるとか、すべて道徳につながっていると思うので、特に意図していないとか…。

C: 意図していないというのは、今次改訂では認められません。道徳教育は音楽科だけではなく、すべての教科、学校教育全体を通じて行うことになっています。音楽科においても当然今までも道徳教育はやってきています。ところが今回の学習指導要領では「音楽科の特質に応じて適切な指導すること」と示された。これは、これまでのような感覚的な指導ではダメですよという意味なんです。意図的に、計画的に、音楽の授業で道徳教育を行うことが求められているということなんです。

音楽科の特質の中で

C: 音楽科の単元や題材で道徳教育が可能な教材をピックアップして、この教材でどんな領域や内容の指導ができるかを考える。例えば『茶つみ』だと勤労でも扱えます。それから、郷土を愛する心。アプローチの仕方しだいですが、やっぱり教師が道徳的に適切な価値を抽出して指導することが大切と言えます。

B: 「仲間はずれができないように合奏しましょう」とか「一人一人の役割があるから、〇〇ちゃんがやらなかったらいい音楽にならないでしょう」みたいなことは毎回言っています。

A: やっぱり音楽科の特質の中で指導することになりますね。

年間指導計画への位置付け

A: 年間指導計画への位置付けはどうなのでしょう。私の地区も統一のプランや指導計画はあるのですが、道徳の項目はまったくありません。

C: 音楽科の中では道徳教育ってたくさんできると思います。可能性もたくさんあります。日本の音楽科の教師がみんな「音楽科の授業で道徳教育を行うんだ」ということを意識してほしいと思います。道徳教科化への動きが加速していますが、豊かな情操を養う音楽科と図工科への、道徳教育の期待は大きなものがあります。いじめ問題など、根深い課題もありますが、音楽科の授業での道徳教育を充実させていきたいですね。

B: 私の学校でも、ここ1ヶ月ぐらい道徳道徳って毎日言われるので、お話をうかがって「そういうことか」とすっきりしました。



日本の伝統から学ぶ

B: 道徳教育は、共通教材の他に、体験的な学習の中でも扱えます。日本の民謡や伝統的な音楽は、表現でも鑑賞でも、取

り上げるときに音楽だけでなく、その所作も学べます。

A: 外国の音楽でも、外国の文化に関心をもてます。

B: 教師が道徳的価値を意識して指導することが必要なのかもしれないですね。自分たちの意識も少し変わるし、たとえば立って「道徳」と構えなくても、そうした実践を積み重ねることで子どもたちの様子も変わってくるでしょうし。

C: くどいけれど、手始めに共通教材を道徳教育の視点から見直してみましょうよ。

協力し合い、思いをもって歌うことから

佐藤日呂志



音楽の授業なのだから、音や音楽を通じて何ができるか、道徳的な内容を指導過程のどこに位置付けるのか、またどのぐらい意識して指導するのが大切です。音楽の時間に子どもたちと「いじめのない学級にしましょう」などの話し合いをする必要はありません。それは趣旨が違います。歌唱教材の歌詞を丁寧に読み取りながら、歌唱における音楽表現の原動力となる「自然や動植物を愛し、大切に作る心や感動する心」を育てていくなど、先生方がすでになさっていることや、お互いに表現を認め合うこと、音楽を聴いて感じたことの違いを認め合う。そういったことから取り組めばよいと思います。

音楽の授業すべてに道徳的な内容を取り入れることはできないので、特に関連するところ、例えば歌唱共通教材や行事関係の楽曲を取り上げるときや、伝統的な音楽文化に触れるとき、全校で『君が代』を歌うとき、お別れの曲を取り上げるときなどに、「全校で協力し合い思いをもって歌う」という内容項目を意識して指導計画に明記するとよいと思います。

今回、指導要領のA表現(1)歌唱には「声を合わせて歌うこと」、(2)器楽には「音を合わせて演奏すること」のように「合わせて」という文言が入りました。音を合わせる、人と合わせる、気持ちを合わせる…いろいろな「合わせる」があるので、そういったものを道徳に関連させるという意識をもって指導することができます。

道徳的な内容を意識した指導が無理なく適切に行われるように、指導計画を作成する段階で関連付けて明記しておくとうよいと思います。

音楽科における ICT教育

現状は…

C: ICT化がものすごく進んでいるところと、そうでないところで学校間、教師間の格差があるのも事実です。電子黒板もそうですよね。何台もない学校では、教師間の争奪戦が繰り広げられます。ひと頃は埃をかぶっているということもありましたけれど。

B: 私の地区は進んでいます。全普通教室にノートパソコン、プロジェクター、書画カメラ、スピーカーがついてるんです。

A・C: すごい！インターネットは？

B: もちろん有線ですが各教室につながっています。子どもが見る回線と先生が見る回線が別になっているので、きちんとフィルタリングして、YouTubeなどは子どもが勝手に見られないようになっていきます。大きなテレビタイプの電子黒板もあります。私も授業中にスマホを使って音を出したり、テレビにつないだりします。今年度末にはタブレットも入る予定です。

A: 私の学校は古くて、ICT機器以前に机を新しくしてほしいぐらいの、そんな環境です。市内の学校には大型のテレビが各教室にあります。ゆくゆくは電子黒板的な扱いをしたくて、という意図もあると思うんですけど、まだまだです。テレビが教室に設置されたときには「え、何これ？幅取るし、置き場がない」という感じでしたが、パソコンをつないで何かを見るのに利用しています。

C: 一応、校内に無線LANの環境は整備されているんですけど、パソコンが教室に1台ずつある環境ではありません。パソコン室には生徒一人につき1台あるのですが、大きな学校ですので、パソコン室の取り扱い状態になっています。そうすると、上の学年優先になってしまいます。子どもたちが活用するという視点で考えると、本来は教室に1台あるのが理想です。もしくは、いつでも使えるような、インターネットができるパソコンを廊下に1台設置するのもいいと思います。

B: 鍵盤ハーモニカの指導も、書画カメラの下に楽器を持って行って映し、子どもに「先生の手を見て」と言います。この機器は記録もできるので、もう一回それを見ながら練習することもできます。

A: これからは「使えない」じゃなくて教師自身もICT機器に強くなないとダメですね。私は自動伴奏オルガンが大好きです。学担には必需品です。あれがないと授業できません。学担の先生が音楽を教えるとなると、「ピアノが弾けないから音楽いやだ」という先生もいらっしゃるの。「こういうものもありますよ」と紹介したりもするんだけど、使っていないとよさが分からないというか、二の足を踏んでいる方もいらっしゃいます。

小さい音が聴こえなくて…

B: 教室でのICT化は進んでいるのですが、校内での音楽科の環境については、まだまだだなと思うことがよくあります。

A: 音楽室もなかなか空いていないことがありますしね。

B: 低学年の場合、自分の教室で授業をすることも多いと思います。でも小さい音って聞こえないんです。『トルコ行進曲』の小さくなる場所なんて、もう小さくなったかどうかもう分からなくなってしまいます。中古のコンボを買ってもらい、空き教室に設置して、第2音楽室のように使っています。がんばって聴かせたいと思う先生はそこで聴かせています。ラジカセは家庭用だから教室には耐えられないです。

A: そうですね。朝の歌を歌うラジカセだって、音が全然聞こえないです。大きくすれば音はひどいし。

B: とても安いけど出力が弱くて、教室で聴かせるのは大変ですね。

音楽的な創作

C: ほんとうに子どもの教育効果を上げるものかどうか、同じように教師もそれを使うことによって教育効果が高まるのかという視点で吟味することが絶対に必要です。いいから使う、便利だから使うというのもいいんだけど、ほんとうにそれで子どもたちに力がついているの？音楽的な力がちゃんとついているのか？ということを確認したいものです。20年ほど前、一度パソコンを使った音楽づくりの授業をしました。『エーデルワイス』の旋律に和音伴奏をつける授業を公開したんですけど、ベテランの先生から「こんなの音楽の授業じゃないよ」と言われたのをはっきり覚えています。付き合い方ってとても難しいなって思います。

B: 子どもたちは、わりと楽しんで曲をつくっています。私も扱ったことがあります。音楽的に高いものを狙うとなると、偶然性の音楽しかつくれない子はいくらがんばっても「うーん…」という感じでうまくできない。そのところをどうクリアしていくのが難しいですね。

やっぱりピアノで歌いたい？

A: 私は以前パソコンを使って、曲の速さを変えたり、間奏の位置を変えたり、工夫をさせる授業をしたことがあります。グループに分かれてパソコンの伴奏にのって歌います。グループ発表もしましたが、最後には「コンピュータの伴奏じゃなくて、ピアノ伴奏でみんなて歌おうよ！」と子どもが言うので、授業の終わりには校長先生の指揮で合唱して終わ

りました。ICT機器は考える手段や手助けにはすごく効果的です。自分たちの思うように速さを変えることができるので、とてもいいんですが、やっぱり最後までこれで終わるのはもの足りないようです。

C: パソコンはリズムや音価というところでは、ある程度シビアに検討できますが、音量を上げるほど音色やバランスについてはダメですもんね。

B: 音楽科の目標を踏まえて、ツールとして学習効果を高めるという視点で使うようにしていくことが大事ですね。

A: そうだと思います。使いどころや授業アイデアの中でどう使っていくのか…。

B: アジアの音楽を扱ったときに、モンゴルのホーミーや、中国の二胡^{にこ}、韓国のアリラン、インドのシタールなど、画像と音楽が出るページのリンクを集めておいて、「10個ぐらい聴いてマイベストを決めよう」という授業をしました。そのときは、45分間子どもたちはずっとヘッドホンをしているという、すごく静かな音楽の授業でした。インドネシアのケチャがいちばん人気だったんですけど、子どもは何回でも好きなだけ聴けるので、どこがよかったかをちゃんと書くことができました。その点は便利だなと思いましたし、子どもたちは自分が好きなものを聴けたことがよかったようです。

好きなものを繰り返し聴くことができる

A: パソコンを使った授業で、「これはよかった!」という実践例についても話さないと…(笑)。

ICTに夢をもつことも大切です

佐藤日呂志

ICTを活用した教育活動は、遠隔地であっても一定の学習ができるといった利点があります。音楽の授業では、音や音楽を媒体として子どもたちの表情を見ながら向き合い、学習を進めることが多いと思います。先生方から、学習形態や教材によっては学習効果が得られたというお話もありました。また、子どもから「ピアノ伴奏で歌いたい」という声があがったことなどを考えると、ICT機器の活用は、無理にではなくバランスを考えながら計画的に進めることが大事なように思われました。

音楽科でICT教育を進めたり積極的に活用したりするためにも、「こういうことができるといいな。こういうものが必要だな」という夢を語っていかなければいけません。そうしないと、「情報化の時代だからこうしなさい」と、ただ押しつけられて使うことになってしまいます。

子どもが創作した作品や、記述したワークシートなどを蓄積しておいて、学習の振り返りができるようにする。また、評価資料に活用するなど、使い方しだいでICT機器は教師にとっても便利なものになるでしょう。

一方、学習効果を上げるためのICTの活用としては、操作一つで楽曲の比較鑑賞ができたり、伝統的な音楽に関連する歴史や文化などの補助資料を視聴できたりすることで、よりいっそう音楽学習が深まり、学習効率もよくなります。これからはますます情報化時代になっていきます。情報モラルについてもぜひ触れておきたいところです。



学校音楽とアウトリーチ

第3回 幼稚園における日本音楽のアウトリーチ

佐野 靖 (東京藝術大学教授)

今回は、12月2日(10:50~11:40)、学校法人町山学園まどか幼稚園(東京都葛飾区)で実施されたアウトリーチを取り上げます。津軽三味線の山下靖喬(東京藝術大学音楽学部4年、津軽三味線全国コンクール1位)と尺八の佐藤圭将(東京藝術大学音楽学部4年)の2人が、年長児83名を対象にアウトリーチを行いました。

【アウトリーチを終えて 対談：町山太郎園長×佐野 靖】

佐野：今回は〈アンサンブル〉〈尺八〉〈津軽三味線〉〈アンサンブル〉という流れでした。

町山：すごかったですね！津軽三味線の素早い手の動きは、子どもにとって視覚的な情報としても面白かったようで、鑑賞中も手の動きをマネしている



子や首を上下に振る子などが見られました。あれほど子どもが身体で表現するとは予想外でした。二人のMCも子どもの興味をとて引くものでした。

佐野：《津軽よされ節》の途中、山下君が子どもたちに語りかけたときはびっくりしました。

町山：あの間合いの取り方、対応は絶妙でした。いつもされてるんでしょうか？

佐野：僕も初めて見ましたので、即興的な思い付きだと思いますよ、リズム打ちも含めて。

町山：少しでも参加型を取り入れてくれたことで、子どもたちは飽きずに聴くことができたと思います。伝統的な曲、オリジナル曲、子どもに馴染みの曲とバランスよく組み合わせられ、楽器や音に関するクイズも楽しいものでした。

佐野：佐藤君は、すっかり「おばけのお兄さん」が定着してしまいました。

町山：尺八の多様な音色とともに、子どもたちには忘れられない体験となったと思います。

佐野：まどか幼稚園でのアウトリーチも足かけ3年になりますね。

町山：日々の保育では、簡単な打楽器に時々触れたり、行事も劇の発表会と音楽の発表会で馴染みのある歌を歌ったりする程度で、音楽で特別な取り組みはしていませんでした。当園は、子どもが自ら遊ぶことを重視している保育を行っているため、いわゆる自由遊びに力を入れています。一斉活動と自由遊びが相互に関わり合うことで遊びがより充実すると確信しています。アウトリーチ的な音楽の一斉活動をきっかけに、日々の自由遊びで行う音楽に関わる遊びが盛んになってくれることを期待しています。

佐野：打楽器のアウトリーチの直後に、トライアングルの店が子どもたちによって開かれたことがありましたね。

町山：トライアングルの演奏の格好よさに憧れてお店ができたのですが、演奏家のようにできないことがわかり、2日で閉店となりました。

佐野：でもそういう「なり切る」という行為は大切ですね。

町山：はい。根拠がなくとも自信にあふれている子どもは新しい物事に積極的に取り組むことができます。



佐野: アウトリーチの経験を通して明らかにになってきたことを教えてください。

町山: 子どもにあまり馴染み深くない曲目ばかりだと年長児といえども集中力が保ちにくいこと、ワークショップを行う場合は事前のすり合わせが相当必要であること、手元が見えるよう楽器の配置を工夫すること、事前に演奏家としっかり打ち合わせできたかどうかで大きな差が生まれることなどが実感できました。また、年長児と年中児が一緒に参加した時、年中児が知っている曲を歌ったところ、歌うのではなく演奏を聴きたかったという年長児の感想が印象的でした。

佐野: 今日《さんぽ》の演奏で歌い出した子どもを「しっ」と合図していた子どもがいましたね。以前、金管五重奏を聴いた子が家に帰って「お母さん、チューバの音聞こえた？」とたずねた話もありましたね。

町山: それまで家で音楽の話などしたことがなかった子で、保護者が感動してご連絡をいただきました。別の例では、それまで一度も言ったことのなかった子が、コンサートに行きたいと願ったそうです。最後まで静かにすることを約束して行ってみたところ、とても集中して楽しむことができたようで親御さんも驚いていました。園の生活全体としては、演奏を「聴く」という経験が、人の話を聞いたり、場の雰囲気を感じて適切な行動をとったりすることにつながっていると感じています。

佐野: アウトリーチをどのように位置

付けていますか？

町山: 子どもにとって一日の中で園での時間がハレ舞台であり、家庭は心穏やかにゆっくり過ごすケの時間です。園の中でもゆったりと好きな遊びを楽しむケの時間、舞台の上で発表するハレの時間があるわけです。このハレとケは両方が重要であり、バランスよく保障されることが必要です。アウトリーチの時間は、まさに子どもにとってハレの時間です。そのため、できるだけ期待の高まる特別な機会にしたいと

思い、回数を限定させていただきました。この時間で音楽の美しさや演奏することへの憧れや楽しみなどを強く感じて自身の情動が揺り動かされることで、より豊かな感性が磨かれ、音楽を用いた自己表現を日常でも行えるようになっていくと考えます。ただ単に素晴らしい演奏があればよいというわけではなく、幼児期の発達を鑑み子どもたちが心から楽しい、すごいといった気持ちを持つ時間にすることが大切だと思います。

参観者からのコメント

音と想像の世界で遊ぶ子どもたち (東京藝術大学大学院生 伊原小百合)

アウトリーチでの子どもたちの反応から、子どもは「音」を日々の生活に結びつけてとらえることのできる天才である、と確信した。それは特に、尺八の様々な奏法を聴く場面において感じられた。メリやカリ、タテユリなど種々の奏法を耳にする中で、子どもたちはそれらを「救急車の音だ」「サイレンの音だ」「機関車ー！」などと想像力を働かせ、自身の経験と結びつけている姿が見られた。鶴の声を表現している音色を聴いたときも、「鳩だ」「蟬だよ」「ニワトリ！」のような思いの回答が続出し、説明にとらわれることなく豊かな想像力を発揮していた。敢えて説明をしなくとも、子どもは音や音楽を自身の経験と結びつけることのできる想像力豊かな存在であることを改めて実感した。



教育におけるICT活用とは何なのか？

第1回 ICTの概要と教育との関連

今、社会全体から注目されている「ICT教育」。
今号より連載で、ICTに関する基本的な情報をお届けいたします。

構成：ヴァン編集部

ICTって？

ICT活用の
実現に向けて

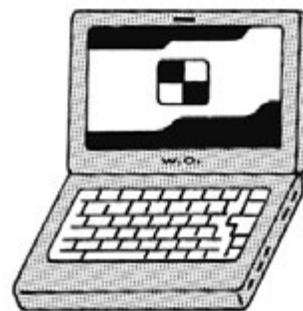
いつの頃からか、ITという言葉とICTという言葉が聞かれるようになりました。ITとICTはほぼ同意語として用いられます。IT(情報技術)はInformation Technologyの略、ICT(情報通信技術)はInformation and Communication Technologyの略で、ICTとは「I」と「T」の間にCommunicationが入った言葉です。

今さかんにいわれる「学校教育におけるICT活用」とは、学校教育において“電子機器や通信機器を使って情報・知識の交流をする”という意味なのです。

2011年、文部科学省は21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指し、「教育の情報化ビジョン」を公表しました。これは「21世紀を生きる子どもたちに求められること」として、「生きる力」とそのための「情報活用能力」の育成の大切さを提言したものです。その実践に向けて、情報教育の充実、ICTの活用、校務の情報化、特別支援教育におけるICT活用などについて述べられています。

〈文部科学省 「教育の情報化ビジョン」の公表について〉
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm

IT	Information Technology
ICT	Information and Communication Technology

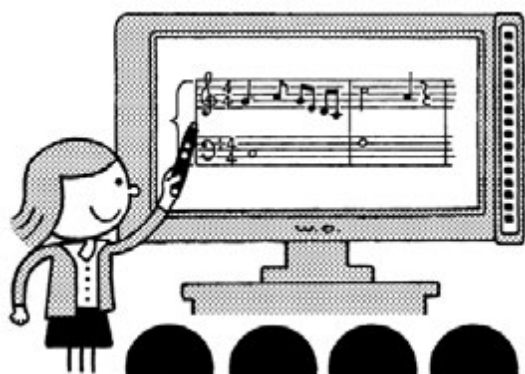


ICT機器には 何がある？

教育現場で「ICT機器」というと、電子黒板やデジタル教材を指す場合も多くありますが、それだけではありません。ここではその主なものをご紹介します。

〈電子黒板〉

テレビ画面やホワイトボード上にコンピュータ画面を投影するだけでなく、付属ペンなどを使用して、黒板同様の書き込みができるもの。また文字や図、イラストなど、画面やボード上に書き込んだ内容を電子変換して、データ保存などが可能となっている。インタラクティブ・ホワイトボードとも呼ばれる。



〈大型デジタルテレビ〉

家庭用テレビと同じ。50型以上のものが望ましい。テレビ放送の閲覧の他、パソコン、DVDなどのデッキ、ビデオカメラ、実物投影機などを接続することもできる。

〈パソコン〉

パーソナルコンピュータ(PC)は個人向けの大きさ・性能をもつ汎用的なコンピュータ。デスクトップ、ノートブック、タブレットPCなどの種類がある。パソコンは日本での略称。

〈タブレットPC〉

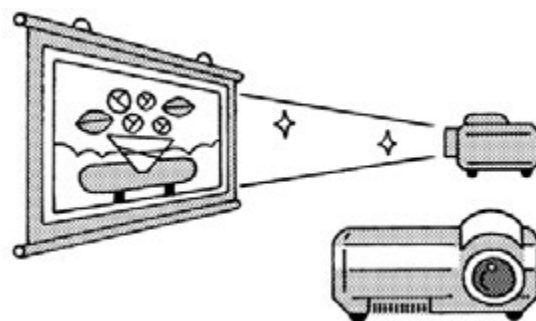
タブレット(平板)状をしており、タッチパネルなどで入力できる、携帯可能なパーソナルコンピュータのこと。OS(コンピュータシステム全体を管理するソフトウェア)別にみると、以下のようなものがある。

iOS	iPadなど
Android OS	Nexusなど
Windows OS	Surfaceなど
独自OS	Kindleなど



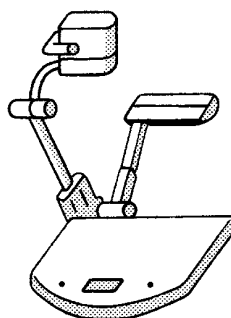
〈プロジェクター〉

スクリーンにモニター画像を映写する機器のこと。コンピュータ画面はもちろん、DVDやテレビなどの映像コンテンツもスクリーンに映写することができる。



〈実物投影機〉

プロジェクターやテレビにつないで、ノートやプリントなどを拡大して映し出すことができる装置。書画カメラ、OHCと呼ばれることもある。



〈デジタル(ビデオ)カメラ〉

撮影した写真や動画をデジタルデータとしてメモリーカードなどの記憶媒体に記憶する装置。

〈デジタル教材〉

電子黒板などのハードウェアに対する、ソフトウェア。パソコン上で起動する。学習に役立つ情報を参照できるもの、思考のシミュレーションができるものなど、さまざまな製品がある。「デジタル教科書」もこの一つ。

Information

2014年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

8月 August

●12日(火)

神奈川県 川崎市麻生市民館

第36回 全日本合唱教育研究会全国大会
神奈川大会(川崎大会)

大会主題 「広げよう歌声 つなげようハーモニー 心をひとつに」

問い合わせ先 第36回全日本合唱教育研究会
神奈川大会(川崎大会)事務局 川崎市立中原中学校 校長 伊藤民子
TEL 044-722-9293 / FAX 044-722-9469
KES30423@to.keins.kawasaki.jp

10月 October

●18日(土)

東京都 東京音楽大学

平成26年度 全日本音楽教育研究会大学部会全国大会

問い合わせ先 本部事務局 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1
武蔵野音楽大学内 全日本音楽教育研究会

●24日(金)

茨城県 取手市民会館、取手福祉会館、取手市立取手小学校

第56回 関東音楽教育研究会 茨城大会

大会主題 「共に親しみ 共に楽しみながら
心をつなぐ音楽を求めて
～一人一人が音楽で輝いて～(仮)」

問い合わせ先 取手市立稲小学校 校長 古谷 譲
〒302-0026 茨城県取手市稲70
TEL 0297-74-3138 / FAX 0297-74-3144

●31日(金)

奈良県 奈良県文化会館国際ホール 他

第56回 近畿音楽教育研究会 奈良大会

大会主題 「つなげよう未来へ つながろう音楽の力で」

問い合わせ先 第56回近畿音楽教育研究会・奈良大会事務局
奈良市立西大寺北小学校 浅尾和貴
〒631-0818 奈良県奈良市西大寺赤田町1-6-1
TEL 0742-43-7433 / FAX 0742-43-4518
saidaijikitae@naracity.ed.jp

11月 November

●6日(木)・7日(金)

東京都 府中の森芸術劇場

平成26年度 全日本音楽教育研究会全国大会
東京大会 小中学校部会大会
東京都中学校音楽教育研究会 第33回研究大会

大会主題 「つなげよう 深めよう 思いをこめて」

問い合わせ先 東京大会実行委員会事務局・事務局長
町田市立忠生中学校・主幹教諭 小島邦昭
TEL 042-791-0821 / FAX 042-791-6514
ongaku2014tokyo@yahoo.co.jp

●13日(木)・14日(金)

大分県 別府国際コンベンションセンター・B-ConPlaza

第55回 九州音楽教育研究会 別府大会

大会主題 「感じとろう つながろう そして楽しもう」

問い合わせ先 別府市立西小学校 矢田幸恵
TEL 0977-21-1460

●14日(金)

北海道 幕別町立白人小学校、幕別町立札内東中学校、
幕別町立幕別中学校、北海道池田高等学校、
幕別町百年記念ホール

第56回 北海道音楽教育研究会 十勝大会

大会主題 「感動を共有し合う授業の創造」

問い合わせ先 北海道音楽教育連盟
十勝支部事務局 上坂 寛
大樹町立大樹小学校
TEL 01558-6-2026 / FAX 01558-6-2875

●14日(金)

岩手県 釜石市立甲子小学校、甲子中学校

第62回 東北音楽教育研究会
第56回 岩手県音楽教育研究会 釜石・大槌大会

大会主題 「～心に音楽のよろこびを～」

問い合わせ先 大会事務局
釜石市立甲子小学校 副校長 千葉愛子
〒026-0055 岩手県釜石市甲子町第9地割87
TEL 0193-23-5525 / FAX 0193-23-5520

● 14日(金)

愛媛県 松山市民会館大ホール

第45回 中国・四国音楽教育研究会 愛媛大会

大会主題 「伝える幸せ 伝わる幸せ
未来にいきる わたしの音楽」

● 20日(木)・21日(金)

群馬県 高崎シティギャラリー、シンフォニーホール

平成26年度 全日本音楽教育研究会全国大会
高等学校部会大会 群馬大会

大会主題 「音楽をつたえる・音楽でつながる
～音楽のチカラを「生きる力」へ～」

問い合わせ先 群馬大会事務局 (担当) 諏訪幸男
群馬県立西邑楽高等学校
〒370-0514 群馬県邑楽郡大泉町朝日2-3-1
TEL 0276-63-5851 / FAX 0276-62-1749
全日音研群馬大会 HP <http://www.gsn.ed.jp/gakko/kou/onkenhs>

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2014

今年度もコンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar」が開催されます。

人気の作曲家、話題の作曲家たちが新作を発表！

同声・女声・混声、各2曲です。

指揮者が指導のポイントを紹介するほか、作曲家自身による楽曲解説も。

またセミナー終了後、「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。(以下文中敬称略)

● 日 時：2014年3月23日(日) 12:45～17:30

会 場：津田ホール

参加費：4,000円(高校生以下2,000円)

テキスト代含む

同声合唱	横山裕美子 『ボトリオフォルバック』 (作詞：山本和子)	八千代少年少女合唱団 (指揮：長岡利香子)
	三宅悠太 『まいごのひかり』 (作詞：工藤直子)	
女声合唱	大田桜子 『私はなぜ?』 (作詞：みなづきみのり)	LSOTシニア・コア (指揮：長谷川冴子)
	長谷部匡俊 『うっすらと秋に酔うたこち』 (作詞：八木重吉)	
混声合唱	佐藤賢太郎 『若葉の想い』 (作詞：佐藤賢太郎)	harmonia ensemble
	佐井孝彰 『海の石』 (作詞：大越 桂)	
司会	藤原規生	

● Nコン課題曲ワンポイントレクチャー講師

(小) 長谷川冴子

(中) 佐藤賢太郎

(高) 藤原規生

※ご参加の方はNコン課題曲の楽譜をお持ちください。

● お申込み・お問い合わせ

教育芸術社 スプリングセミナー実行委員会

TEL：03-3957-1168 / FAX：03-3957-1740

<http://www.kyogei.co.jp/>